

高い。世界では00年ごろから使われ始めているが、当時から現在まで基本的な機能はほとんど変わっていないのがその証拠だ。

国内メーカーが勝るとすれば、コスト面が診断支援の部分だろう。ダウインチの場合、鉗子などの手術器具は専用品を必要とするため高額のランニングコストがネックだ。導入コストは1億円より大幅に安ければ病院として検討できる。

ダウインチのカメラは既存の内視鏡に比べ視野の角度が限定される。鉗子の使い勝手もあり良くない。組織を切開・止血する手術器具も他社製品より信頼性が劣る印象がある。

日本の医療機器メーカーは画像診断領域で優れた技術がある。手術中の映像から腫瘍を検出し医師に知らせる、あるいは重要な臓器や血管を画面上で強調するなど、機能をロボと統合すれば優位性を示せるのではないか。(談)